

10月6日(日)、鶴見川で漕艇団体混合のボート練習をした後、大半は麒麟ビール鶴見工場でのビア・パーティーに集まったが、参加しない僕は横浜の石川町へと向かった。

数ある横浜山手西洋館では14:00から、山手111番館でソプラノ・ピアノ・フルートの、ブラフ18番館でフルートとピアノのコンサートがあり、いずれも無料。どちらに行くか迷ったが、駅に近いイタリア山にある後者を選んだ。西洋館のサロン・コンサートは有料のもの、無料のものが半々だが、無料の場合の演奏者はヴォランティアである。といっても音楽大でのプロが多い。開演まで時間があるので、僕は隣の「外交官の家」を見学した後、会場に早めに入り、椅子並べを手伝った。聴衆20名ほど。

演奏者の福田徳子(のりこ)さん(フルート)、笥(かけい)あづささん(ピアノ)はここも含め、すでに各西洋館で何回も演奏をしているとのこと。女性演奏家は、肩と背中を露出していることが多いが、「小さなサロン・コンサートでは窓際で演奏するので日焼けに気をつかうのですよ、今日は曇りでよいけれど。でも、今日は室内に蚊がいますね。演奏中に刺されたらどうしよう」とは福田さんが笑いを誘う。



ブラフ18番館 真ん中に突き
出たところの一階が演奏会場。
狭いでしょう

福田徳子さん

写真は現物でないが
こんな感じの木製
フルートだった

笥あづささん

- 1) まず、ポピュラーなバッハの『G線上のアリア』から始まった。演奏者から2メートルのところに腰かけていたので、演奏者が息を吸うのがよく聞こえる。フルートは息を吐いて吹きかけるから、間合いで空気の補給が必要だ。
- 2) 次は、バッハの『フルートとチェンバロのためのソナタ ホ短調 BWV1034』。バッハの作とされるフルート・ソナタは他人の作ではないかと疑われるものを含め6曲あるが、これは自筆譜は現存しないものの、本人作と確証されている由。緩・急・緩・急4楽章の教会ソナタ形式。第1楽章を聴くと心が落ち着き、第3楽章には清澄感がある。第4楽章は名人芸が要と思われた。
- 3) ここでフルートの説明あり。茶色い木製のもので、ブラジルの木材を用い埼玉で制作されたものという。最近は管弦楽団でひびかせるために金属製が多いが、木製は外形が太く、音が柔らかい。柔らかい木材では柔らかい音が、硬い木材では硬い音が出るという。「こじんまりしたサロン・コンサートでは、木製が、よく合います。」とのこと。「バッハの時代は、作曲家は王侯貴族の好みに合わせなければならぬ制約があり、ロマン派以降のように自分の好きなようにできないこともあったようです。」とのことだが、このフルート・ソナタを聴いていても、どこに制約の影響があったかは僕には分からない。
- 4) 林光の『「七つの子」変奏曲 本居長世の首題による』だ。林光は最近亡くなったと記憶していたが、もう亡くなって7年になる。この曲は、もともとフルートとピアノのために作曲されたもの。主題を聴いて、胸にジンとくるものがあった。僕が幼い時、母がよく歌って聞かせてくれた曲だから。第1変奏と第3変奏は、装飾音を沢山使った速めの変奏。第2変奏は、短調で夜を思わせる哀愁に満ちた緩い日本民謡調。

【知ったかぶり蛇足：本居長世は本居宣長の直系と言う意味では作詞家にふさわしいと思う方もおられようが、山田耕作と同期の作曲家。この歌の作詞は野口雨情。「七つ」には「七羽」と「七歳」

との説があるが、雨情自身が母と別れたのが七歳のとき、作詞時に雨情の息子が七歳だった、ということから七歳が背景にあるらしい。七歳で子供のカラスなどいないが、人間の感情が反映されたのだろう。]

5)ここでピアノ独奏になる。ショパンの『前奏曲 嬰ハ短調 作品 385』。ショパンの前奏曲では、バッハの平均律クラヴィーア曲集を意識して作曲された 24 曲の作品 28 が有名で僕も CD で聴くことがあるが、ショパン晩年作曲の前奏曲のひとつである作品 385 を聴くのは初めて。寛さんによれば、二つの理由でこの曲を選んだ。一つには、好きなフランスのピアニスト、ミシェル・ダルベルトがアンコールに好んで弾くから。もう一つの理由は、2 頁の譜面の中にショパンらしい曲想が凝縮されているから、という。

ここで、前日の NHK FM 『鍵盤のつばさ』で、ピアノにストで作曲家の加藤昌則が、ショパンの夜想曲第 2 番について、「この曲、好きじゃないんですよ」と言っていたのを思い出した。僕は大好きなので、「え？」と思ったが「作曲上、平凡すぎる」からだそう。「でも演奏していると感情移入の幅があって、演奏の都度、異なる思いをすることができる」というようなフォローをしてはいた。その逆をいくのが、この前奏曲作品 385 なのかもしれない。転調がめまぐるしいから作曲の参考になるんじゃないかなと、作曲も演奏もできない僕は勝手に思った。

6) 最後は福田さんがもどってきてフルートとピアノ。シューベルトの『ソナチネ作品 137-2 D385』。元来ヴァイオリンとピアノ用に、ヴァイオリンの名手である兄のために作曲され、シューベルトの死後、その兄が譜面を発見して出版させたという。「フルート用に編曲された譜面がないので、ヴァイオリンの譜面を使います。フルートは音域がせまいので、オクターブ下げたり、不自然にならないように早めにオクターブを下げたりします。」とのこと。寛さんいわく「今日はバッハで始まり、シューベルトで終るけど、どちらも重いですね。」でも、僕として初めて聴く、このシューベルトの曲は重いというより心地よく響いた。特に第 1 楽章はシューベルトの兄への愛情が感じられた。先に聞いたバッハのフルート・ソナタではピアノが通奏低音に徹していたが、このソナチネでは、ピアノも存分に活躍している。帰宅後、YouTube でコパチンスカヤのヴァイオリン、ファジル・サイのピアノによる同曲の演奏を観賞したが、なかなか躍動感にあふれるものだった。

なお、福田さんから挿話あり、「日唄友好 150 周年記念の展覧会へ行ったら、シューベルトのメガネが展示されていたけど、レンズが小さいだけでなく、両目の間隔が狭すぎて驚きました。」と。[知ったかぶり蛇足：ソナチネは小さいソナタという意味。それでもこの曲は 20 分ほどかかった。イタリア語ではソナチネは女性名詞複数形であり、一曲なら単数形ソナチナ。日本では一曲でもソナチネという通例だから目くじらたてて文句を言うことではない。スパゲッティは男性名詞複数形で、麺一本(単数形スパゲット)だけ食べることはないから、日本での通称は正しい。ところが、日本で言うラザーニャは女性名詞単数形で、ラザーニャ一枚だけを食べるのではなく、何枚もの層重ねを食べるのだから複数形のラザーニェがイタリア語としては正しい。]

7)アンコールは、フォーレのドリー第 1 曲「子守歌」。「先程の七つの子変奏曲の前奏で気が付きました？この子守歌の前奏を使っていたのですよ」と福田さんから言われ、「聞いたことがあると思ったら、そうだったのか」と思った。この曲を僕は大好きで、「フルート(中山早苗)とハープ(篠原史子)による子守歌」という子守歌集の CD 中の一曲として愛聴してきた。ピアノ連弾の原曲は、「フォーレ室内楽集」という CD セットで聞いている。この日は、「フルートとピアノ用に編曲された譜面がありますので、それを使います」ということだった。

以上